

朝 日 貝 塚 I

—範囲確認試掘調査概要（1）—

1995年3月

水見市教育委員会

朝 日 貝 塚 I

—範囲確認試掘調査概要（1）—

1995年3月

氷見市教育委員会

序

青く澄んだ富山湾に面し、海の幸、山の幸に恵まれた永見市は、古より人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育み、守ってきています。特に、大正7年に調査された大境洞窟は日本で最初の洞窟遺跡調査として、同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、ともに国指定史跡になっております。

このうち朝日貝塚は、大正13年の発掘調査で確認された住居跡の部分が、昭和30年に再掘され、覆瓦が建てられ、来訪者の利便を図り、広く活用されてきました。

しかしながら遺跡周辺は市街地に近接しており、遺跡の保護・活用をめぐって、新たな検討を迫られるようになりました。

このため市教育委員会では、将来に向けて朝日貝塚のより一層の保護・活用を図るため、3か年計画で遺跡範囲確認を目的とした試掘調査を実施することにし、本年度はその初年度であります。

調査にあたりまして、文化庁・富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターをはじめ、多くの方々のご指導・ご協力をいただきました。とりわけ、尊父とともに二代にわたって朝日貝塚を見つめ続けてこられた富山考古学会会長漢辰先生、北陸の縄文時代研究を通して朝日貝塚とも関わりの深い金沢美術工芸大学教授小島俊彰先生には、格別のご指導を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

永見市教育委員会

教育長 江幡 武

例　　言

- 1 本書は、平成6年度に実施した、富山県氷見市朝日丘所在の朝日貝塚の範囲確認試掘調査の概要報告である。
- 2 調査は国庫補助事業として、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長西井紀夫・社会教育主事浦勇仁が調査事務を担当し、課長島勝彦が総括した。また課長代理山岸啓次・社会教育主事高野弘文・主事宮下和子の協力を得た。
- 4 調査は、氷見市教育委員会生涯学習課学芸員鈴木瑞廣と同大野究が担当した。
- 5 調査参加者は、以下の通りである。
浜本清作・沢井正雄・菅田富美子・坂口愛子・田中すみ・二崎きみ・山本ヨシエ・島峰子・東海舞子。
- 6 本書の編集・執筆は、鈴木瑞廣の協力を得て、大野究が担当した。
- 7 調査及び本書の作成にあたって、以下の機関・個人から指導・協力をいただいた。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。
富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市文化財審議会・渋辰・小島俊彰・山田栄行・神子清・杉野幸枝・三矢恵京・伊藤文代・閑谷明美。
- 8 出土遺物と調査にかかる資料は、氷見市立博物館が保管・管理している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 遺跡の地理的環境	
第2節 遺跡の歴史的環境	
第3章 朝日貝塚に関する調査・研究の歩み	5
第1節 遺跡発見まで	第12節 第1～3号人骨の検討
第2節 朝日貝塚の発見と大正7年の調査	第13節 昭和24年の発掘調査
第3節 大正10年の調査	第14節 自然遺物の紹介
第4節 大正13年の調査	第15節 住居跡の再掘
第5節 大正15年の調査	第16節 水見高校による研究
第6節 昭和2年の調査	第17節 各地点の把握
第7節 第2・3号人骨の取り上げ	第18節 朝口下層式土器の再検討
第8節 第4号人骨の発掘	第19節 人骨の再検討
第9節 硬玉製大珠などの紹介	第20節 イルカ骨の再検討
第10節 昭和6年の調査	第21節 動物骨の再検討
第11節 縄文土器の紹介	朝日貝塚主要文献リスト 資料「高岡新報」朝日貝塚関連記事
第4章 調査の成果	30
第1節 調査の概要	第3節 遺構
第2節 層位	第4節 遺物
第5章 まとめ	34
報告書抄録	

図 版

図 目 次

図版 1 明日貝塚周辺空中写真	1 昭和 30 年代の明日貝塚保存倉
調査地区遠景	2 明日貝塚と周辺の道路
図版 2 調査地区遠景	3 近代初期の水見町と現在の市街地
調査地区近景	4 大正 10 年の調査地点
図版 3 発掘作業風景	5 大正 10 年の調査地点の層位と竪穴の断面図
埋め戻し作業風景	6 大正 11 年の指定地範囲
図版 4 I トレンチ	7 大正 13 年の発掘調査地区
図版 5 II トレンチ	8 明日貝塚付近地形図
図版 6 I トレンチ出土上器・石器	9 明日貝塚調査地点
II トレンチ出土上器	10 明日貝塚指定地と遺物散布範囲
図版 7 II トレンチ出土土器	
図版 8 II トレンチ出土土器	
図版 9 II トレンチ出土石器・土器・土謫	
II トレンチ出土銅鏡・指定地内表採土器	1 第 2 図の凡例
図版 10 II トレンチ出土土偶	
明日貝塚・岩上遺跡表採埴輪片	

表 目 次

1 第 2 図の凡例

第1章 調査に至る経緯

朝日貝塚は、大正7年に発見され、同11年に史跡に指定された遺跡である。

一般には日本海側の数少ない縄文時代の貝塚のひとつとして周知され、わが国で初めて発掘調査によって住居跡が確認された遺跡、代表的な縄文土器のひとつである「バスケット型土器」の出土した遺跡、重要文化財硬玉製大珠の出土した遺跡、あるいは北陸の縄文時代前期の標識遺跡などとして知られている。

地元では、同時に発見された大境洞窟とともに、氷見を代表する遺跡として親しまれ、昭和初期には出土遺物の一部が地元に返還される一方、昭和30年には住居跡に保存倉が建てられて見学ができるようになるなど、遺跡の活用においても先駆的な遺跡として評価できる。

しかし、遺跡は市街地に近接し、発見以後周囲には徐々に住宅・事業所などが立ち並ぶようになってきた。近い将来、遺跡の保護と開発事業との間で軋轢が生じるのは、必至のことと思われる。

そこで問題となるのは、遺跡の範囲である。

第3章に記したように、指定地の範囲は大正7年と同10年の発掘調査の成果をもとに確定されたが、これは主として貝層の範囲をおさえたものと思われる。

その後渕長氏によって指定地はA地点とされ、さらにB地点・C地点・D地点が追加された。また、その後の調査によりA地点の貝層が指定地の南側にも広がることが確認されている。

一方朝日貝塚を縄文時代だけではなく、弥生時代・古墳時代・古代・中世との複合遺跡としてみたとき、その範囲はさらに広がると考えられる。

これらの状況を受けて、氷見市教育委員会は朝日貝塚の範囲を確認するために、平成6年度から3カ年、国庫補助事業として試掘調査を実施することにした。



第1図
昭和30年代の朝日貝塚保存倉
(氷見市立博物館所蔵写真)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約6万1千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山間部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、かつてラグーンであった平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶJR氷見線が通り、主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市などの市外へ通勤する人が多い。

一方、能登半島入りの観光地として、市内には旅館・民宿が立ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

朝日貝塚の所在する朝日丘地区は、市街地の南西部にあたる。遺跡西側は市域中央を西から東に向ってのびる朝日山丘陵の東南裾であり、ここから東側の湊川まで緩やかな斜面になっている。標高は丘陵裾で約7m、今回調査を実施した最下段の水田で約1.2mであり、湊川の水面はほぼ海平面の高さにあたる。

国指定地は誓度寺境内と畑地、周囲は宅地・道路・畑地・水田などとして利用されており、感覚的には「市街地の中の取り残された一角」と言えよう。

第2節 遺跡の歴史的環境

朝日貝塚の周囲は市街地であるため、これまで大規模な発掘調査はなく、点的に遺物の出土が知られるのみである。

縄文時代では岩上遺跡があり、前期～後期の資料が出土している。一方十二町潟排水機場遺跡からは、前期前葉頃の資料が採集されている。また、朝日水源地遺跡では後晩期の資料が出土している。

弥生時代では、岩上遺跡で大型石包丁が採集されているが、詳細は不明である。

古墳時代では、朝日山丘陵に朝日長山古墳・朝日潟山古墳群・朝日谷内横穴がある。このうち6世紀前葉の朝日長山古墳は、前方後円墳と考えられ、県内で数少ない円筒埴輪をめぐらし、武器・馬具・冠帽片などが出土している。また朝日潟山1号墳は、測量調査によって全長約33

mの前方後方墳と考えられている。

古代では、岩上遺跡で須恵器・土師器・瓦塔などが採集されているが、詳細は不明である。また江戸後期の「応憲雜記」には著者田中屋右衛門宅の庭（現在の水見市民会館のあたり）から須恵器甕が出土した記事がある。

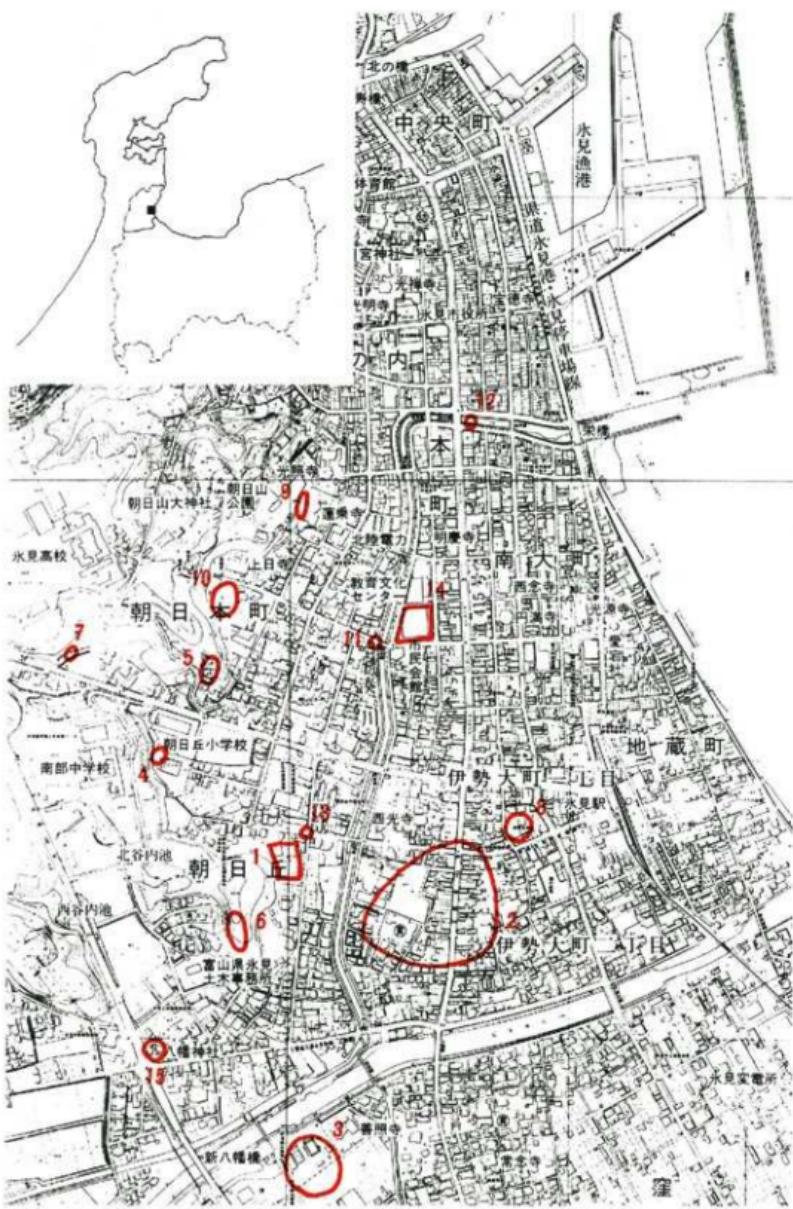
中世では、伊勢玉神社・蓮乗寺・上日寺・朝日橋詰・中の橋近くの川底から石造物や珠洲などが出土している。また朝日十字路遺跡では、珠洲壺に入った唐・宋・明錢など6488枚が出土している。

このように、市中心部の歴史はまだまだ未解明の部分が多い。それは原始・古代にとどまらず、例えば中世においても文献資料から水見町は14世紀中頃には成立していたと思われるが、考古資料からはそれを説明するほどの資料の蓄積はまだない。

こうした状況を思い合わせると、大正11年という早い段階で史跡として周知されたことにより、朝日只塚とその周辺の地域が「取り残された」意義は大きく、地域の歴史を垣間見る窓として一層の保護・活用が望まれよう。

第1表 第2回の凡例

番号	遺跡名など	主な時代	主な出土遺物
1	朝日貝塚（国指定範囲）	縄文～中世	縄文土器・石器など
2	岩上遺跡	縄文・弥生・古代	縄文土器・大型石包丁・瓦塔など
3	上二町湖排水機場遺跡	縄文	縄文土器・石器など
4	朝日本源地遺跡	縄文	縄文土器
5	朝日長山古墳	古墳	鉄刀・杏葉・冠帽片・須恵器など
6	朝日渾山古墳群	古墳	
7	朝日谷内横穴	古墳	
8	伊勢玉神社中世墓	中世	五輪塔・板石塔婆・珠洲など
9	蓮乗寺中世墓	中世	珠洲
10	上日寺中世墓	中世	五輪塔・板石塔婆・珠洲など
11	朝日橋詰遺跡	中世	五輪塔など
12	中の橋散布地	中世	石仏
13	朝日十字路遺跡	中世	珠洲・古錢
14	田中屋右衛門旧宅		
15	雀森		



第2図 朝日貝塚と周辺の遺跡（1/10000）

第3章 朝日貝塚に関する調査・研究の歩み

大正7年の発見以後、朝日貝塚では数度にわたる発掘調査が行われたほか、遺跡・遺構・遺物等についての紹介・報告・検討が色々となされてきた。これら先学の業績は、本遺跡にとって大切なものであるばかりでなく、日本あるいは地域の考古学の歩みのなかでも重要な意味をもつものといえる。

しかし、発見から4分の3世紀以上が過ぎた今、記録不足も災いして、本遺跡の調査研究史には、若干混乱を来している部分があると思われる。また、今回の調査の目的である遺跡の範囲確認の基礎資料としても、学史の整理は必要なことといえよう。

そこで本章では朝日貝塚に関する調査・研究の歩みを、改めて年代順に整理してみた。なお、縄文土器のうち、朝日下層式及び朝日C式とされるものについては、各地の報告書や論文などで多くの紹介・検討があるが、ここでは本遺跡に直接関わりのあるもののみを取り上げた。また用語等は、それぞれの文献で使用されたものに従った。なお本章では敬称を省略する。

さらに章末に参考資料として、大正7・10年の「高岡新報」朝日貝塚関連記事を載せた。

第1節 遺跡発見まで

朝日貝塚の所在地は、近世射水郡朝日村の南端の一角にあたる。

朝日村は近世水見町の南西部に接し、寛文10年（1670）の村御印では、村高308石・免6、小物成は山役34匁（「高物成帳写」）であり、また天明5年（1785）の戸数は26戸である（「折橋家臣記」）。

「正徳社号帳」によれば、同村では神明社3社と山上・祇園の5社を祀る。また寺院は淨土真宗光風寺、日蓮宗蓮乗寺、真言宗上口寺、同千手寺がある。このうち光風寺は天明元年（1781）又は安永9年（1780）に、また蓮乗寺は近世後期に、それぞれ朝日村に移転したという。これらの寺社は、湊川をはさんで水見町と接する村北半にかたまり、遺跡のある南側については、今のところ近世の様子をうかがえる資料はない。おそらくは、農地としての利用と思われる。また、明治4年（1871）の絵図を現在の地図に投影すると、湊川の川幅は遺跡付近で現在の2倍から3倍あり、遺跡東側の水田は川の中に含まれる（第3図）。

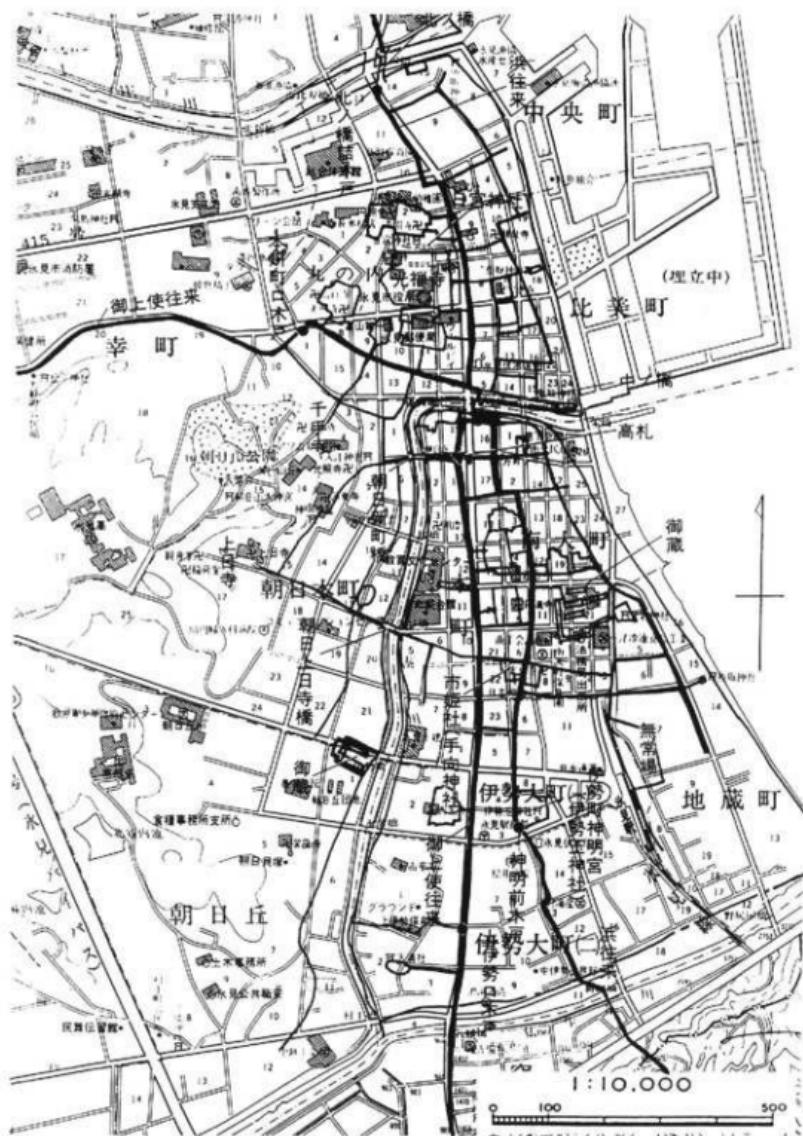
朝日村は明治22年（1889）に水見町に編入された。

大正7年（1918）の朝日貝塚発見の新聞記事によれば、贊度寺建設前の遺跡付近は畠地であり、ここには往古30余りの寺院が存在していたという伝承があった。地元では土器片などの散布が知られていたが、それらはこの寺院の伝承に結びつけられていたようである。

なお、現在の贊度寺境内には中世の石造物が散見されるが、それらが当初からここにあったのか、それとも寺院建設後に持ち込まれたものなのかは、不明である。

この大慈山贊度寺は、臨済宗国泰寺派總木山国泰寺の末寺である。

国泰寺は高岡市西川に所在し、山号は摩頂山という。前身は正安元年（1299）法燈派の慧雲



第3図 近代初期の水見町と現在の市街地（鈴木瑞磨作成）
（「特別展近世の水見町と庶民のくらし」水見市立博物館、平成6年3月から転載）

妙意によって水見小竹地内に開かれた東松守で、乾元元年（1302）に国泰寺と改められ、元応元年（1319）には西田に移っていたとされる。

「水見郡寺院明細帳」によれば、賢度寺は貞和3年（1347）に足利尊氏によって二上山中に創建された国泰寺塔司のひとつで、応仁年間に兵火で焼失。その後文化年間に射水郡乱橋村に再建されたが再び荒廃し、大正8年2月水見町に再興と伝えられる。

「忠懇雜記」文政12年（1829）6月7日の項には、「小雨降る五ツ過禁天暑し日命離小暑六月節四ツ頃より西田上野管度寺方ニおひて集有之ニ付加七殿同道ニ面滌越申候ハツ頃よりぬか雨降る少冷なり夜止宿候」とあるが、これは管度寺が文化年間に再建されたしばらく後のことを思われる。なお、管度寺が所在した西田上野地区は、地理上は西田集落の中に位置するが、地籍は乱橋村である。

第2節 朝日貝塚の発見と大正7年の調査

大正7年（1918）7月管度寺の移転建築のため、水見郡水見町朝日宇馬場地内を地均したところ、貝殻や土器破片などが多数出土した。

おりしも同年6月、水見郡宇波村大境では、海食洞内にある白山社改築工事で人骨・土器などが多数出土し、新聞にも取り上げられた。この記事を見た東京帝国大学助手柴田常忠は、7月3日の夜行列車で東京を立ち、5日に宇波村の現地を訪れている。

この時の柴田の野帳には、洞窟の平面見取図と層位の見取図の間のページに「水見町 朝日国泰寺の別院の建築する場所 壺 燐骨 先住民」と走り書きがあり、この頃に水見町でも遺物の出土があることを聞き及んでいたと思われる。

また柴田の報告によれば、「7日は伊藤郡書記と吉田巡査部長に導かれて、水見町なる朝日公園に存する弥生式土器の出た場所や古墳などを踏査して」とあることから、この日に現地を訪れた可能性もある。

しかし、柴田とその後に駆け付けた松村暎は、大境洞窟を調査したのち、7月10日に帰京しているため、この時にはそれ以上の調査はなかったと思われる。

なお7月25日付「高岡新報」は、7月7日に「貝殻（略）野獸の骨及び瓶の破片」が掘り出され、7月11日に至り「土器の破片、石斧の如きもの」が発掘された、と伝えている。

その後秋までの管度寺建設現場の様子を示す資料はないが、同年9月から10月に再び柴田らが中心になって、大境洞窟の本格的な調査が実施されたのち、柴田と松村によって朝日貝塚の調査が行われた。その様子は「高岡新報」記事に詳しく記されている。

これによれば、柴田と松村は水見警察署長の林宣之の案内で10月18日現地を訪れ、帰京を延期、翌19日に人夫3人を雇って発掘調査を実施。この日の夜松村は一足早く帰京し、翌20日柴田は人夫2人を雇って約半日発掘調査を実施している。

なお、この時の詳しい発掘位置・面積は、不明である。また出土した遺物は、大境洞窟の遺物と共に、東京帝国大学に送付されたと思われる。

大正7年の発掘調査で明らかにされた点は、次の通りである。

- 1 水見町朝日字馬場の遺跡は、貝塚であること。
- 2 石器時代の土器・石器・獸骨などが出土し、これらは大境洞窟第6層のものに該当すること。
- 3 付近には、なお豊富な遺物が含まれるとと思われること。

第3節 大正10年の調査

大正10年の発掘調査は、「富山県史跡名勝天然紀念物調査会報告」第2号（1921年12月）に、大村正之が「石器時代及古墳時代遺跡」として報告しているものである。¹⁰

なお、この報告は調査の日付の記載が無いため、これまでほとんどの文献で大正7年の調査と混同されていた。

しかし、水見郡長が崎山省吾であること（在任期間大正8年5月～大正11年3月）、柴田常恵の所属が内務省であることなどから、大正7年の調査とは区別すべきである。

ここでは、補足資料として当時の新聞記事を引用し、改めて大正10年の調査として位置付けたい。

大正8年に史蹟名勝天然紀念物保存法が公布され、富山県でも翌年に史蹟名勝天然紀念物調査会が組織された。

これを受けた大正10年3月には「富山県史蹟名勝天然紀念物調査会報告」第1号が刊行され、同年6月には内務省史蹟名勝天然紀念物調査会調査員の柴田常恵が、講演と指定保存のための調査を行うため、富山県に出張することになった。

新聞記事によれば、柴田は6月13日に来県し、富山・魚津・高岡・出町（砺波）で講演したのち、16日に水見町に来て投宿、17日に大境洞窟・朝日貝塚を調査、19・20日には桜谷古墳群と国泰寺を調査している。

のことから朝日貝塚の発掘調査は、6月17日に行われたと考えられる。なお、調査が17日だけで終了したのか、あるいは新聞では空山の翌18日も行われたのかは、不明である。

調査では4・5人の人夫を使って、4カ所の発掘が行われた。また、この間寺院背後の崖斜面の落ち込みの発掘も行われている。

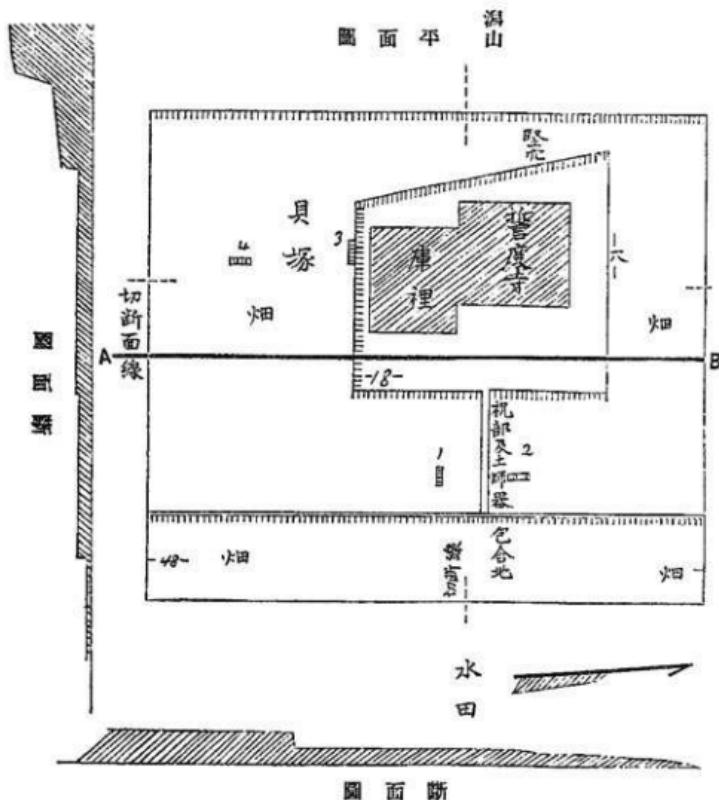
調査参加者は柴田の他、佐々木安五郎（内務省属）・大村正之（県調査会調査委員）・小柴直矩（県調査会書記）らで、崎山水見郡長らも立ち会ったと思われる。

なおこの時の発掘面積を大正13年の報告の図面と合わせて推定すれば約4m²である。また出土した遺物の行方は不明である。内務省に送られたのであろうか。

大正10年の発掘調査で明らかにされた主な点は、次の通りである。

- 1 朝日貝塚からは、石器時代と古墳時代の遺物が出土すること。
- 2 古墳時代の遺物は寺院境内の東側から出土するのに対して、石器時代の遺物は主として境内の西側から出土し、両者の差が平面的に確認されること。

代時器石塚馬字日朝町見水
地跡遺代時墳古及

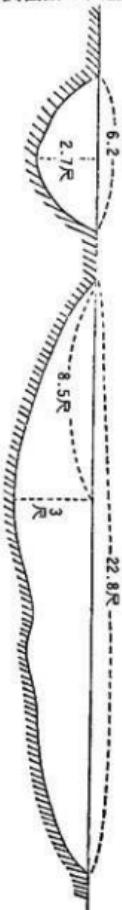


第4図 大正10年の調査地点（文献1から転載）

3號貝塚の断面図



画面断の穴竪



第5図 大正10年の調査地点の層位と竪穴の断面図（文献1から転載）

- 3 寺院背後の崖斜面に竪穴があり、その中に灰屑・木炭と多くの縄紋土器破片・石斧・石鎌が含まれること。
- 4 石器時代の地層は、8層に分層でき、うち貝層が4層あること。
- 5 第2・4層の縄紋土器と第6層の縄紋土器の文様に差があること。
- 6 貝層の貝は赤貝が最も多く、その他蛤・蜋・蛇等があること。
- 7 貝層から海獸・鹿・鮑の骨が出土すること。
- 8 石器時代の層位から、長期にわたる遺跡であると推定されること。
- 9 背後の丘陵に、城塞の跡が認められること。
- 10 近くの雀森に占據があること。

なおこの調査の結果を受けて、朝日貝塚は誓度寺境内を中心に3反2畝16歩(3,226m²)が、大正11年3月8日に史跡として指定を受けた。

第4節 大正13年の調査

大正13年の発掘調査は、「富山県史跡名勝天然紀念物調査会報告」第6号(1924年12月)に、大村正之と林喜太郎が「朝日貝塚発掘調査報告」として報告しているものである。

大正11年(1922)3月8日に、内務省から史跡の指定を受けた朝日貝塚であるが、同年3月24日に誓度寺が火災で焼失し、再建されることになったため、それに先立って発掘調査が実施された。

調査は、内務省史跡名勝天然紀念物調査会調査員柴田常恵と内務省嘱託田澤金吾が出張し、大村と林が立ち会い、人大4人を使って、大正13年(1924)6月8日から同年6月21日までの延べ14日間実施された。調査面積は12坪(約40m²)である。

出土した土器・石器・貝類・骨類等は、木綿袋約100枚に入れたものを、サイダー箱17個に詰め、内務省に送られた。

大正13年の発掘調査で明らかにされた主な点は、次の通りである。

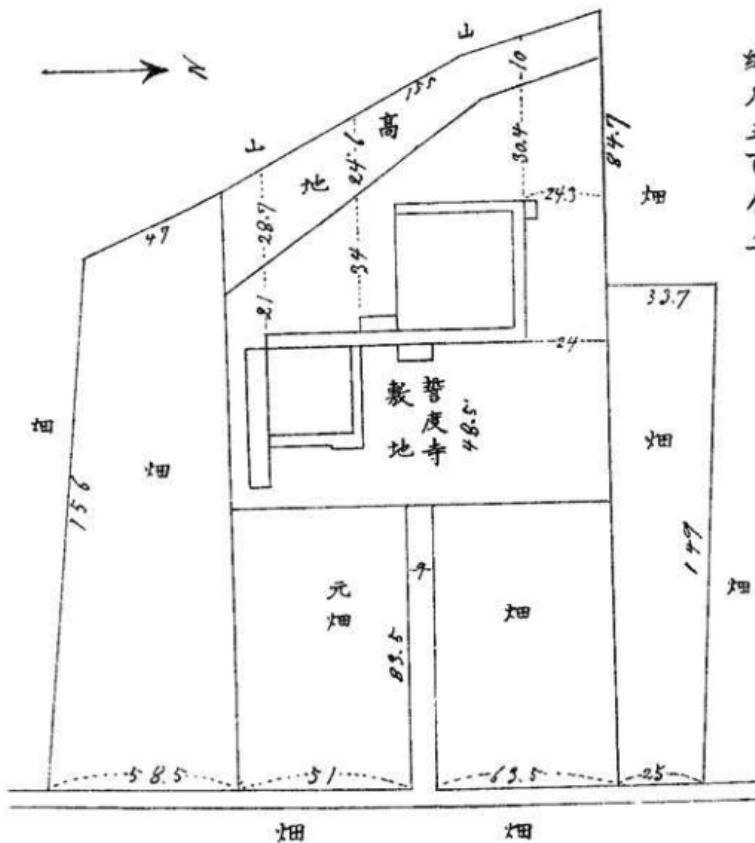
- 1 貝層が2層であること。
- 2 最下層から出土した土器が「朝日式縄文土器」として、他の土器と区別されたこと。
- 3 炉のある石器時代住居跡が2棟確認され、さらに層位によって両者の時期差が認められたこと。
- 4 第1貝層と第2貝層では、主体となる貝の種類に差があること。

なお出土遺物は、縄文式土器(多量)・弥生式土器(少量)・石鎌・石斧・四石・石錐・石匙・石錐・貝塚勾玉・状耳飾・翡翠破片・貝殻(アカガヒ・ハマグリ・アサリ・シジミ・アカニシ・カキ・サメエ・バイ・ホタテ・ツメタガヒ・ウミニナ・イガヒ等)・魚骨(鰯・鮎)・歯骨(猪・鹿・猿・いるか)・鳥骨・有孔大針状骨器・小針状骨器・管状骨器・不明骨製品・小針状角器である。

第5節 大正15年の調査

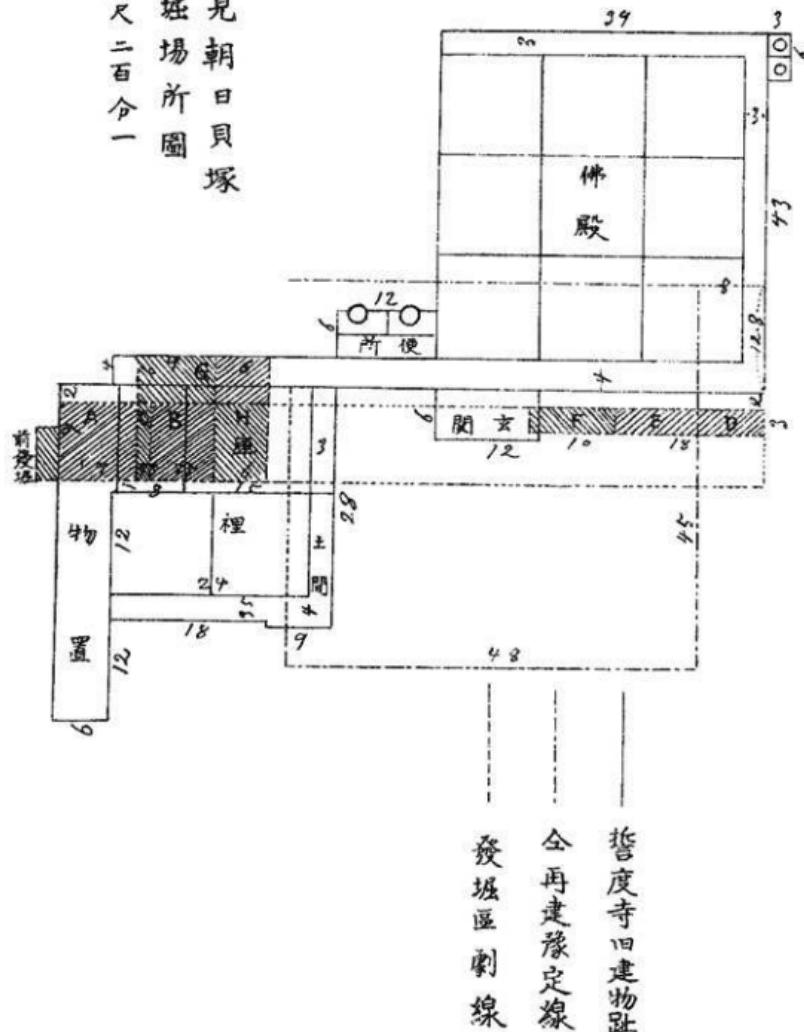
氷見町朝日貝塚指定地略図

縮尺五百分之一



第6図 大正11年の指定地範囲（文献2から転載）

水見朝日貝塚
發堀場所圖
縮尺二百令一



大正15年の発掘調査は、「人類学雑誌」第42卷3号（昭和2年3月）に、岡本規矩男・大井敏雄・二井一馬が「越中氷見朝日貝塚人骨發掘予報」として報告しているものである。

岡本らは金沢医科大学（現金沢大学医学部）に所属し、同校山身で当時氷見町で開業していた医師堀謙三の案内で現地を訪れ、同町の淡嘉平次と共に淡所有の畠地を調査した。

調査は大正15年11月5日に現地を視察したのち、同年11月7日から同11月9日までの3日間行われ、岡本・大井・二井・堀・淡及び濱長が参加した。

調査地は内務省指定地に南接する畠で、面積は12m²である。

大正15年の発掘調査で明らかにされた点は、次の通りである。

- 1 試掘調査地点の貝層は、1層だけであること。
- 2 3体の人骨が確認されたこと。
- 3 第1号人骨は、伏位をとり、20歳前後の男性と推定されること。

出土遺物は人骨の他、繩文土器・獸骨（野猪・鹿・イルカ？）・魚骨（鮎・カジキ）・鳥骨・貝殻（魁蛤・文蛤・紅螺・蟹守・硯貝・蝶螺）である。

第2・3号人骨は埋め戻され、第1号人骨は、金沢医科大学に運ばれた。その他の遺物の行方は不明である。

第6節 昭和2年の報告

地元の朝日耕地整理組合が、指定地北側の畠地の土砂を採取して、道路改修や低地埋立に使用したところ、遺物が出土した。この時採集された遺物について、林喜太郎が「朝日先住民族遺跡」として、「富山県史跡名勝天然記念物調査会報告」第8号（1927年5月）に、報告している。

遺物が出土したのは、昭和2年3月5日であるが、それ以外にも持ち去られた物があったと思われる。

この報告で明らかにされた点は、次の通りである。

- 1 遺跡、特に貝層が指定地北側でも確認されたこと。

報告された遺物はごく僅かで、鹿角破片2・磨製石斧破片2・打製石斧破片1・石棒破片1・繩文土器破片2である。遺物は地元の淡嘉平次が保管した。

第7節 第2・3号人骨の取り上げ

大正15年の発掘調査で確認された第2・3号人骨が、昭和2年3月に、金沢医科大学解剖学教室によって、取り上げられたらしい。昭和2年の岡本等の報告が「本年三月本発掘をなす予報とす」とされているのは、このことか。しかし、この「本発掘」に関する報告はなく、詳細は不明である。

第8節 第4号人骨の発掘

淡長の「10代の思い出」（『大境』第14号、1992年3月）によれば、旧制富山高等学校教授の藤田篤（動物学）によって、第4号人骨が発掘され、人骨は金沢医科大学に寄託されたという。

詳しい日時は不明であるが、富山県立氷見高校歴史クラブ「氷見地方考古学遺跡と遺物」(1964年8月)では、昭和2年としている。また、調査箇所は第1～3号人骨の近くとされるが、正確な位置は不明である。

第9節 硬玉製大珠などの紹介

昭和3年9月18日に開かれた日本考古学会例会で、高橋健白が朝日貝塚の遺物を紹介している(『考古学雑誌』第18巻第10号、1928年10月)。

高橋は同年北陸を訪れた際に、氷見にも足を運び、大堀洞窟と朝日貝塚を訪れ、地元の湊平次や堺謙三の所蔵する朝日貝塚出土遺物を実見している。特に、硬玉製大珠は、「考古学雑誌」この号の巻頭絵に实物大の写真が掲載され、学会に広く知られた。¹⁵

第10節 昭和6年の調査

昭和6年の発掘調査は、「富山県史跡名勝天然記念物調査報告」第12号(1932年5月)に、大村正之が「朝日貝塚東方湊川沿岸の発掘物」として報告しているものである。

なお、この調査を実際に行った淡島も、「朝日貝塚遺跡内の泥炭地包含層」(『大境』第1号、1951年12月)と、「湊川変遷史雑考」(『氷見春秋』第2号、1980年11月)、及び「10代の思い出」(『大境』第14号、1992年3月)で、調査について触れているので、これらを参考に記述する。

朝日貝塚の東を流れる湊川は、明治初めに掘削された新川とともに、上流にある十二町潟の叶川として機能していたが、毎年数回満潮時に海水が逆流して水田に塩害を与えるため、防潮水門を新しく造り換える必要が生じた。

新しい水門の掘削工事で出る土砂の中に、土器の破片が含まれるのを知った淡は、朝日貝塚の包含層の範囲や、対岸の岩上遺跡との関係に关心を抱き、木芳橋から上流へ33間(約60m)の湊川左岸を発掘調査した。

調査は昭和6年3月31日に行われ、発掘面積は約4m²である。この調査はまもなく新聞に取り上げられ、その記事をみた大村に改めて淡が報告し、それが県報告書に掲載された。

昭和6年の発掘調査で明らかにされた点は、大村報告によると次の通りである。

- 1 調査地点では、約7尺の無遺物粘土層の下に、厚さ3寸から5寸の遺物包含層があり、そこは湊川水面より3尺ほど下であること。
- 2 包含層には、縄文土器・石器・弥生式土器・祝部土器に混じって、漆器や有機物質などが含まれること。
- 3 縄文土器は、指定地内では出土していない薄手式のものが多く、厚手式のものは磨滅していること。
- 4 薄手式縄文土器に随伴して、土偶頭部が出土したこと。

同じく大村報告による出土遺物は、薄手式縄文土器・厚手式縄文土器・弥生式土器・祝部土器・土偶頭部・獸骨・魚骨・栗実・松球・野桃種・漆器片・木片・焼けた木片・円形有孔土器・

石器破片・石刀破片・石斧・凹石等である。¹⁷

第11節 縄文土器の紹介

小島俊彦「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」(『大境』第9号、1985年10月)によれば、朝日貝塚の大正13年の発掘資料は、昭和の初めに当時水見町商工会长であった瀧島平次が尽力して、将来博物館を作るという文部省との約束のもと、地元で保管されることになり、三重県水見中学校（現在の富山県立水見高校）に移されたという。¹⁸そして当時水見中学校の教員であった鳴尾正一が整理を始めたが、戦争に向かう社会の混乱のなかで中断したという。

昭和12年3月にその鳴尾正一が『郷土史料 朝日貝塚の土器紋様』と題した小冊子を自費出版している。ここで紹介されているのは、水見中学に移管された資料のうち、朝日貝塚下層出土の約30点である。

第12節 第1～3号人骨の検討

金沢医科大学に保管されている朝日貝塚出土の人骨について、「金沢医科大学解剖学教室業績」31（1938年）において、研究の成果が発表された。同書には中山正秀による「朝日貝塚下肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 大腿骨ノ研究」と、片上逸郎による「朝日貝塚人上肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 上腕骨ノ研究」が収録されている。

中山は第1～3号人骨の左右大腿骨を、片上は同じく左右上腕骨を、それぞれ研究材料として計測するとともに、他の遺跡出土人骨や東アジア各地域の現代人との比較を行った。なお、ここで両者とも第1号人骨は男性、第2・3号人骨は女性と推定している。

第13節 昭和24年の発掘調査

昭和24年5月20日の富山考古学会の発会にあたり、同会顧問八幡一郎の指導で発掘調査が実施された。調査は同年5月21・22日の二日間行われ、史跡指定地の南側の約26m²が発掘された（富山県史跡名称天然紀念物調査会・富山考古学会「史跡朝日貝塚第三回発掘調査」1950年3月）。

昭和24年の発掘調査で明らかにされた点は、次の通りである。

- 1 調査地では、貝層が稀薄であること。
- 2 頭部を北に向けた屈葬と思われる第5号人骨が発見され、青年男性骨と推定されたこと。
- 3 第6号人骨の一部が発見されたこと。

出土遺物は人骨の他、縄文土器・弥生式土器・須恵器・土埴・石斧・石鎌・菅玉・小玉・獸骨・魚骨・貝（ハマグリ・アサリ・アカガヒ・シジミ・ツメタガヒ・バイ・イタヤガヒ）などである。

第14節 自然遺物の紹介

昭和26年に林大門が朝日貝塚の自然遺物の目録を紹介している（「朝日貝塚の自然遺物」『大境』第1号、1951年12月）。これは昭和24年の発掘調査で出土した資料に、林が採集したものと加えて、昭和25年5月の富山考古学会総会に招かれた酒詰仲男が鑑定したものである。ここで

は、貝類27種・魚類6種・鳥類1種・哺乳類7種・爬虫類1種・植物2種が紹介されている。

第15節 住居跡の再掘

昭和30年9月19日～同21日の3日間、大正13年の調査で発見された住居跡の部分が再掘され、そこに保存倉が建てられ、内部が見学できるようになった。

第16節 氷見高校による研究

昭和39年に氷見高校歴史クラブが、朝日貝塚について総括的なまとめと検討を行った(『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』1964年8月)。特に縄文土器については、大正13年の調査で出土した資料を中心に分類され、前期から晩期に至る様相が示された。特に標識土器としての朝日下層式が図版とともに提示されその後の基本資料となつたほか、C地点出土の前期中葉の土器も紹介され、朝日C式として認識された。

第17節 各地点の把握

湊長は「氷見海岸の人文景観と文化財」「氷見海岸二上山学術調査書」(1966年1月)で、大正末年の実測図をもとに、朝日貝塚をA・B・C・Dの4地点に分け、各地点ごとの特徴を示した。

これによれば、A地点はほぼ国指定地にあたり、標高7m前後のかん水産貝類を主体とする貝層で、前期末葉から後期前葉の土器が出土し、B地点は、標高5m前後の淡水産の貝類を主体とした貝層で、後期中葉から晩期にかけての土器が出土する。またC地点は、舌状の古い砂丘上の遺物包含地で、前期中葉の土器が出土し、D地点は、湊川水位より低い包含地で、前期中葉から須恵器までが含まれるという。

第18節 朝日下層式土器の再検討

小島俊彰は、「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」(『人境』第9号、1985年10月)で、湊長と氷見市立博物館が保管する朝日貝塚の上にA地点出土の、前期末葉から中期初頭の縄文土器を紹介・検討した。

第19節 人骨の再検討

林夫門と溝口優司は、「富山県朝日・小竹両貝塚出土の縄文時代人骨について」(『国立科学博物館報』第18号、1985年12月)で、朝日貝塚出土の人骨と、富山市小竹貝塚出土人骨について検討を加えた。このうち朝日貝塚の資料は、金沢大学医学部解剖学教室保管の第1～3号人骨である。

この報告では、主な四肢骨の計測値から、朝日貝塚第1号人骨は男性、第2・3号人骨は女性と推定され、またいずれも現代北陸日本人よりは、他地方の縄文時代人に類似している点が多いとされた。

第20節 イルカ骨の再検討

平口哲夫は、「富山湾沿岸における縄文時代のイルカ捕獲活動」(『人境』第10号、1986年12月)で、朝日貝塚出土のイルカ骨の再検討を行い、石川県真脇遺跡の例と比較した。

1. 大正末年の実測
2. 等高線は尺基点は渕川水面
3. 等高線外の黒塗地は山地
4. Aを囲む地域は国指定地
A, B, C, Dの黒網目区域のうち,
A, Bは貝層の拡がり, C, Dは遺物
散布地
5. 太黒網線の基盤は砂層



第8図 朝日貝塚付近地形図（文献10から転載、ただし60%に縮小）

これによれば、朝日貝塚では少なくとも24頭のイルカが確認され、マイルカの比率が高く、またこのうち5頭について、解体によるものと思われる切り傷が確認されるという。

第21節 動物骨の再検討

金子浩昌は、「富山・石川県下遺跡の動物骨」(『大境』第11号、1987年12月)で、氷見市立博物館保管の朝日貝塚出土動物骨を分類結果を報告している。

これによれば、魚骨はマダイ・クロダイ・マグロ類、鳥骨はヒメウ・ミズナギドリ類・ハクチョウと思われる中手骨、獸骨はイルカ類(マイルカ・バンドウイルカ)・イノシシ・ニホンジカ・イヌ・ツキノワグマ・ニホンアシカが確認された。

なお、教育委員会が現在把握している朝日貝塚出土資料の保管者は、東京大学総合研究資料館(主として大正7年の資料と思われる)、奈良国立文化財研究所(山内清男資料、主として大正13年の資料の一部と思われる)、氷見市立博物館(大正13年の資料の一部及び採集品)、南山大学人類学博物館(昭和初期の採集品か)、漢晨(昭和2・6年の資料及び採集品、重要文化財硬玉製大珠を含む)である。

注

- 1 氷見町は、昭和27年8月に氷見郡余川村・八代村・恭山村と合併し、氷見市になった。
- 2 高岡市西田は、旧氷見郡太田村の一部。太田村は昭和28年10月に高岡市に合併した。
- 3 現在の氷見市宮田地区。宮田地区は、高岡市西田地区と接する。
- 4 氷見町役人を歴任した川中尾権右衛門(1803~1859)の日記。権右衛門は国泰寺の檀徒であり、「応懇録」には同寺関係の記事が多い。
- 5 現在の氷見市大境地区。宁波村は昭和29年4月に氷見市と合併した。
- 6 柴田常恵 1918 「越中氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」「人類学雑誌」第33卷7号。
大境洞窟遺跡の調査については、下記文献を参照していただきたい。
大野究 1991 「大境洞窟遺跡発掘調査の周辺」「氷見市立博物館年報」第9号。
- 7 国学院大学考古学研究室蔵。
- 8 注6柴田文献。
- 9 朝日公園とは、市街地西部の朝日山公園のことか。朝日山公園は、明治41年に日露戦争を記念した銅像が建てられたを契機に整備が進んだ公園である。近くには昭和25年に発見された朝日長山古墳があるが、大正年間に弥生土器の出土や古墳の存在が認識されていたことを示す資料は今のところない。従ってこの時柴田が訪れた場所は特定できない。
- 10 この大村の報告は、「高岡新報」大正10年7月2日・同3日に掲載された談話記事とはほぼ同じである。
- 11 この縦穴は、現況では確認できない。なお柴田はこれ以前、明治38年に岩手県東磐井郡長

- 坂村（現東山町）で竪穴群を、大正5年に武藏国分寺停車場脇の工事現場で、中央にかががあり、灰と土器破片の出土する石器時代の竪穴断面を実見している。
- 柴田常恵 1927 「石器時代住居跡概論」「石器時代の住居跡」
- 12 城塞の跡については、すでに大正7年の調査の時に柴田が触れている。ただし、これが具体的に何を指し示すのか、現況の地形では不明である。なお、この丘陵には朝日潟山古墳群が所在する。
- 水見市教育委員会 1993 「朝日潟山古墳群・中村天場山古墳測量調査の成果」「水見市遺跡地図〔第2版〕」水見市埋蔵文化財調査報告第14冊
- 13 雀森についても、すでに大正7年の調査の時に柴田が触れている。雀森は水見市朝日丘に所在する比高約8m、周囲約60mの独立小丘陵で、頂上に八幡社を祀る。現況では、社殿建築のため頂部が削られており、石郭など古墳の存在を裏付ける資料は確認できない。
- 14 わが国において、正式に住居跡として発掘調査された初めての例である。ただし、明治38年から翌年にかけて、N・G・マンローが神奈川県三沢貝塚の発掘調査を実施し、炉跡を確認し、住居を想定しているが、学会ではあまり認識されなかった。
- Munro 1908 「Prehistoric Japan」(1982年第一書房復刊)。
- 小林達雄 1994 「縄文土器の研究」小学館
- 15 渋長によれば、硬玉製人珠は「貝塚をはずれた東側包合地」で出土し、伴出土器は縄文中期後半の古府式期・串田新式期のものであったという。
- 渋長 1972 「硬玉製大珠—富山県水見市朝日貝塚出土—」『月刊文化財』12月号
- 16 岩上遺跡は、昭和50年に水見市教育委員会が一部発掘調査を実施し(未報告)、縄文時代前期～後期の資料が出土している。
- 17 この調査について渋長は、平成4年に再度成果をまとめている。
- 渋長 1992 「10代の思い出」「大境」第14号。
- 18 水見高校歴史クラブ『富山県水見地方考古学遺跡と遺物』(1964年8月)によれば、返還されたのは大正13年の出土資料の約半数であるという。
- 19 報告書では発掘調査の地点を、「潟山の麓から五〇メートル東方で、誓度寺より約七〇メートル南方にあたり一五〇平方米ほどの一画で」としているが、当時の調査参加者や畑の耕作者に聞いたところ、実際には指定地に南接する畑(150番地)の中であったということである。
- なお、この調査の成果については、早川莊作も昭和24年5月28日付富山新聞に「「朝日貝塚」の新発掘」としてまとめている。

朝日貝塚主要文献リスト

A 発掘調査等の報告に関するもの

- 1 大村正之 1921 「石器時代及古墳時代遺跡」『富山県史跡名勝天然紀念物調査会報告』第2号
- 2 大村正之・林喜太郎 1924 「朝日貝塚発掘調査報告」『富山県史跡名勝天然紀念物調査会報告』第6号
- 3 林喜太郎 1927 「朝日先住民族遺蹟」『富山県史跡名勝天然紀念物調査会報告』第8号
- 4 大村正之 1932 「朝日貝塚東方淡川沿岸の発掘物」『富山県史跡名勝天然紀念物調査報告』第12号
- 5 富山県史跡名勝天然紀念物調査会・富山考古学会 1950 「史蹟朝日貝塚第二回発掘報告」

B 遺跡・遺構・遺物を紹介・検討したもの

- 6 柴田常惠 1927 「石器時代住居跡概論」『石器時代の住居跡』
- 7 日本考古学会 1928 「葉報・考古学会例会記事」『考古学雑誌』第18卷10号
- 8 島尾正一 1937 『郷土史料 朝日貝塚の土器紋様』
- 9 富山県立水見高校歴史クラブ 1964 「水見地方考古学遺跡と遺物」
- 10 渡辺 1966 「水見海岸の人文景観と文化財」『水見海岸二上山学術調査書』
- 11 渡辺 1972 「硬玉製大珠-富山県水見市朝日貝塚出土-」『月刊文化財』12月号
- 12 小島俊彦 1985 「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境』第9号

C 人骨・自然遺物等に関するもの

- 13 岡本規矩男・大井敏雄・二井一馬 1927 「越中水見朝日貝塚人骨発掘予報」『人類学雑誌』第42卷3号
- 14 片上逸郎 1938 「朝日貝塚人上肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 上腕骨ノ研究」『全沢医科大学解剖学教室業績』31
- 15 中山正秀 1938 「朝日貝塚人下肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 大腿骨ノ研究」『全沢医科大学解剖学教室業績』31
- 16 渡辺 1951 「朝日貝塚遺跡内の泥炭地包含層」『大境』第1号
- 17 林大門 1951 「朝日貝塚の自然遺物」『大境』第1号
- 18 林大門・溝口優司 1985 「富山県朝日・小竹面貝塚出土の縄文時代人骨について」『国立科学博物館専報』第18号
- 19 平口哲夫 1986 「富山湾沿岸における縄文時代のイルカ捕獲活動」『大境』第10号
- 20 金子浩昌 1987 「富山・石川県下遺跡の動物骨」『大境』第11号

D 郷土資料関係

- 21 水見市文化財保存会 1957 「大境洞窟遺跡と朝日貝塚」
- 22 渋長 1980 「瀬川亥遷史緯考」『水見春秋』第2号
- 23 渋長 1992 「10代の思い出」『大境』第14号

E その他

- 24 富山県史編纂委員会 1958 「富山県の歴史と文化」
- 25 水見市史編修委員会 1963 「水見市史」
- 26 富山県 1972 「富山県史」考古資料編
- 27 富山県埋蔵文化財センター 1991 「貝塚—縄文ムラの風景—」

資料 「高岡新報」朝日貝塚関係記事

以下は「高岡新報」に掲載された朝日貝塚関係記事である。「高岡新報」は、明治22年に創刊された「高岡商況」を前身とする夕刊紙である。

転載にあたって、縦書きを横書きに改め、漢字は新字体にした。また、誤植等による明らかな誤りもあるが、それらは訂正せずそのままにしてある。

大正7年7月25日

▼石器時代遺物

◎永見町でも発見

水見郡宇波大境にて蓋に多くの人骨等を発掘したるが今度又復た水見町朝日に於て人骨土器等を発掘したりと云ふが警察部に達したる警察の報告に依れば場所は水見町朝日字馬場五二、五三の合併民有地にて七月七日太田村字西田国泰寺の別室新築に付地盛を行へる際最初貝殻を発見し続いて野獸の骨及び甌の破片を発掘、十一日に至り土器の破片、石斧の如きものも発掘、土器は網紋形なり伝説に依れば右は上日寺の境内に属し背後に於ける朝日山上には寺院の形跡ありて古代寺院の墳墓なりしならむと想像し居るが器物は何れも石器時代のものにして墳墓とは何等の関係なきやうなりと尙ほ前記場所は朝日山東南に面し約五百歩の畠地にて丘陵を為し眺望佳なるが拠築は一小部分なるにより全部を発掘せば此上何物を発見するか知れざるべしと

大正7年10月20日

▼大境以上の遺跡発見

◎永見町朝日誓度寺の地均し中

=柴田氏は滞在、松村氏は帰京

=石器時代遺物中の珍なる模様入の土器

水見郡宇波大境の石器時代遺物の発掘を終了し東京帝大理科大学助手柴田常恵、松村藤氏は十八日水見町に來り同地の警察署に立寄れるより右◇大境の遺跡を最初発見せし当時水見町朝日（朝日山下東方の小丘にて約五六十間距たり十二町川貫流する所なり）に臨済宗国泰寺の本寺誓度寺は同郡太田より移転し堂宇並に庫裡を建築可きに付地均し工事の折り石器時代の土石器遺物掘り出せし所あるより林永見署長は右◇向氏を案内せしかば研究す可き見込ありとて帰京を見合せ十九日向氏は人夫三名雇ひ上げ発掘せるに石器時代の石斧彫模様付或は模様なき破壊したる土器並に獸骨貝殻等を掘り出せるが柴田氏の語る所に依れば大境の遺物以上にして県下に出土せし石器時代遺物中珍らしき事第一にして原人は山の東方日当りの良い所にて此の◇川水を飲用して居たものならんと、今二十日には人夫二人雇入れ半日斗リ発掘する予定なるが発掘物は全部箱詰めとし東京帝人へ送付のため大正組運送店へ出荷せり、柴田氏の見込みに依れば未だ同地に約百坪斗リ発掘すべく何れ地主の承諾を得て追而発掘可く因に松村助

手は十九日午後七時水見駅発にて帰京せり

大正7年10月21日

▼穴中で鶴嘴を揮ふ

柴田大学助手は語る

=朝日山の発掘物は

=学術上意外の収穫

水見郡宇波村大境の古代洞窟が本邦人類学上貴重の宝庫であると一度学界の視線を蒐めてから地方人士の頭にも一小土器の破片さへ注意を払ふやうになつた、茲に水見町を去る西方約二町を距りたる朝日の連亘せる丘陵、俗に△馬場と称する畠地より古米往々土器の破片が発掘されたが村人等同地附近は往古三十数ヶの寺院の存在してゐたと云ふから或は墓地の跡であるかも知れぬと深く意にも留めなかつたが、今回大境の発掘を終了して帰京せんとする東京々大理工科教室の柴田常憲、松村暉の両氏に話した処大は見て置く価値があらうと十九日林水見警察署長の案内で同地を探査して発掘に従事すると△石器時代の石斧、矢尻、獸骨、土器の破片等続々発見した事は既報の如くである、記者は二十日の午前暖かな小春日和の日を浴びて同発掘地を訪ぶと柴田氏は穴の中に座り込んで二人の人大夫を背馳し自ら鶴嘴を以て土塊を突き廻して居る、霜降の背広服に日に焼けた麦藁帽と云ふ未だ夏姿の体で石乞乞と働いてゐたが、断片的に語る「表面は貝殻を以て屑を為してゐるから△一種の貝塚とも云へよう、此所は恰度大境の第六層に該当するので石器時代の遺物として頗る珍品が多い、殊に模様は極めて精巧なもので如何して原人が之程の頭を有つてゐたのかと今から想像してみても驚く程で、實際高岡銅器なんか既足のものがある、而も彫模様や朱の着色なんか非常に凝つたものが多い点は同時代のものとしては異例であろう、何分△寄繕な破片になつてゐるから、之を大学へ送つて組立て、見なければ具体的の意見は発表されぬが形状等も種々の変化があり確かに大境以上のものであらう、人骨は未だ出ない、而し此下を掘れば出て来るに違ひないが之で打止めて今晚か明朝帰る予定にしている」と穴の中から飛び出し「之から此附近の地形を見ませう」と村人の案内にて歩き乍ら「一休北国路即ち裏日本は交通の不便もあつたが△人類学上余り研究がされてゐない、貝塚は東海道方面には頗る多いが、北陸道には余りないやうである、今回当地へ出張して学術上意外な収穫があつたので喜んでゐる」と話しつゝ行くと一町位で俗に雀森と称する丘陵の前に出る、氏は「△る程之れは円墳だよ」數十段の階段を上りて頂上に鎮座する八幡社に詣で、引返して発掘地の山上に登る、東には峨々たる立山の連峰は屹立し、西端は遠く宇波の岬より霞んだ△能登半島は夢の如く近く唐島は呼べは庵へん程に見えて柴田氏は此絶景に見惚れて「絶景ですが、別荘地には好適です、殊に此地形は類形である處が先住民の住居地と定めた処でせう、海は近く此の山脚を洗つてゐたものに違ひなく、十二町川を東方に控へた自然の要害地である、若し敵が搦手より攻めると背後類形の咽喉部で防禦する予定なんでせう」と麗らか

な日光を浴び乍ら柴田氏は眼をつぶつて長閑な空想に耽つてゐた

◎柴田氏帰京

◎出発に際し語る

別項柴田常恵氏は今朝水見発八時の列車にて途中富山県庁に立ち午後四時五十分富山駅發にて岐阜の途に就きたるが、氏は語る

我が國に於て眞面目に遺跡の調査研究を為したるは今より約四十年前にして爾来各地に遺跡の發掘さるゝものあり斯界の学者は之れを基礎として色々ある意見を有し居たり、然るに今回大境の遺跡發見せらるゝに至り稍々之れ等色々ある意見を統一し得るの好材料をもつたるものなり、而して今回の如く学界各方面の大家が出張、立会にて観察研究したるは今後はイザ知らず前代未聞也、小生も更に明春機会を得て一二回の出張を為すべし、□た水見朝日山麓の遺跡は大境の遺跡第六層に匹敵すべきものにして此の両者を比較せば朝日山麓のものは其の層五尺余ありて頗る材料（遺物）豊富なるのみならず一般に大型にして稍發達したものと認め得べき点少なからず然し入骨の如き未だ發掘せられず、要するに今回朝日山麓にて發見したる只塚は全国各地にありて些して物新たなりと称し得ざるも北陸道としては越後に二ヶ所、越中の大神山等有名なるが今回のものは夫れ以上なり、而して大境のものと何等かの連系を發見し得ば實に面白かるべし云々

大正10年5月26日

史蹟保育の講演会

柴田委員長の來県

宇波洞穴実地視察

内務省史蹟名所天然紀念物保存調査会柴田考查委員長は富山県に講演を兼ねて出張し水見郡宇波村海岸の前人種が居住したに鍾乳洞内の古代遺跡及び三重、愛知両県の実地視察をなす

大正10年5月27日

柴田氏の來県

内務省史蹟名勝天然紀念物保存調査会の柴田考查委員長は本県へ出張を命ぜられたると既報の如くなるが氏は本県史蹟名勝天然紀念物保存調査会の事業として来月十三日より四日間富山、高岡、魚津、出町に於て開催すべき該講演会の講師として来月十二日來県の予定にて序に氏は去る大正八年実地踏査せる水見郡宇波村の鍾乳洞を再び調査し尚ほ這般神通江畔上新川岡大広田村千原崎に於て發掘したる弥生式土器等を調査の苦なりと

大正10年6月7日

柴田講師踏査

既報の如く来る十三日午後二時より富山師範を振出しに引続き魚津、高岡、出町の四箇所に於て開会する本県主催の史蹟名勝天然紀念物講演会の講師史蹟名勝天然紀念物調査会考査員柴田常恵氏は同日午前九時五十四分来富の由なるが講演会終了後尚一晩日滞在して神通河口上新川郡大広田村千原崎の遺物包含地及び永見郡宇波村大境の洞窟を実地踏査する筈、因に云ふ出町の会場は同町尋常高等小学校に決定したり

大正10年6月13日

天然紀念物よりも精神保存

根本は公徳心

去る大正八年、史蹟、名勝、天然紀念物保存法なるものを発布せられ、保存の必要を認むる土地並門跡植樹物乃至地質の成物にして既に指定済となれるものもあるが、其の他は目下折角調査中に属して居る。此種の法律は歐米各国に於て夙に前例ある由にて、謂はゞ我邦は後れ馳に其の制度に倣はんとするのであらう。いかにも史蹟、名勝、天然紀念物は、彼の人工に成れる美術工芸品の或物と併せ、何れも皆尊重すべき國宝なるが故に、物質文明の駆々として進歩し已まさる今日、之れが毀損及び破壊を防止するの必要ありと雖も、保存上に於ける此法律の効力に就て疑問なきを得ない。歴史上の遺跡と名勝の如きは、其の保存取締の道比較的容易なりとするも、動物、植物、地質、鉱物等の山谷河海に生産し存在する天然紀念物に至りては、採取若くは捕獲を取締るが為に一々監視者を其の箇所に常設するを不可能にして、唯公衆の自制に待つの外莫かるべしと思はれるにも拘はらず、其の公衆の自制なるものが甚だ信じ難く頼み難いでは無いか。例へば往年本県の一教育家山本茂君が立山々中の某所に於て鉱物界の珍品玉滴石を発見し学界の驚嘆するところとなり、学者等は當時大いに之れが保護保存の必要を説きたれども、懲取の結果今や該鉱物の痕跡を留めぬ。又日本北アルプスの秀巒大蓮華一帯に於ける高山植物の如きも同様の運命を辿り其の成物は絶滅の期遠きにあらざるべしと称せられて居る。殊に同法律指定の物件は、其の指定に依りて愈好奇心を増進せしめ、却て禁を犯さしむるの嫌ひ無しとせざるが故に、同法律の効果を完ふするには何よりも先づ公徳心の振興を図る事が肝要なるべく、柴田常恵君の県下巡回講演も察するに其の説かんとするころは茲に存するであらう。果して然ならば国民教育を根柢より改造して、国民道德の一大革新を行はざる限りは到底其の目的を達し得ざるものにして、大学教室勤務の片手間に柴田君が内務省の役人に代り一寸説法を試むるなどは姑息千万であると謂はなければならぬ。論より証換最近文部省の調査に成れる「児童の行為に現はれた現代思想の影響」と題せし本紙所載記事を見るも、個人主義、利己主義、物質主義は小学児童の言動の上に顯然たるものがある。然し之れ全く現代思想の影響にして教育の悪影響に非ざるを認めれども、同時に又、教育は児童の精神的素質を改善することも出来ないのであらうと思はれる「從來の教育に於て善良となつた者は、自然の善良なる素質が悪き周囲の影響に打勝つて善良となつたのである、決して教育の力に依つたのではなく

教育に依つたものならば、教育の門を潜つた者は皆善良になるべき筈だ、併も堕落した者も亦教育のために堕落したのではない、それならば教育の門を潜つた者は皆堕落すべき筈だ、彼等は自己の本来の素質に依つて堕落したのである從來の教育は全く無為であつた、人を作る要素は教育ではなかつた」それは外國の或学者が自國の教育を評した言葉なれども、我邦の教育も亦同様である。故に教育を改造し、善良なる国民の素質を作らしめ、天然物よりも寧ろ一層嚴重なる國民精神の保存法を講ずる事が天然記念物保存の根本義であらねばならぬ。

大正10年6月17日

各地近信 高岡

史蹟名勝講演 県主催史蹟名勝天然紀念物講演会は十五日午後二時より坂下町高等小学校内に於て開□当日伊藤工芸学校長を始め市内射水水見の一・市二郡の官公吏各種教員、青年団員等の聽講あり内務省派遣史蹟名勝天然紀念物考查員柴田常恵氏の講演は多大の感動を与へ満場立錐の余地なき盛会を呈したり

内務属水見へ

月下来県中の内務省史蹟名勝天然紀念物調査会考查員柴田常恵氏と共に史蹟調査の為内務属佐々木安五郎氏は昨日来県し水見町に向へり

大正10年6月18日

各地近信 水見

柴田教授来水 東京帝大教授柴田常恵氏は十六日水見町に米リ余一樓に投宿十七日宇波村大境の大穴の調査及び水見町朝日御泰寺別院横の貝塚の調査を為し十九、二十日に太田村雨晴付近附近にある武内宿禰の孫大河音足尼の古墳並に臨済宗本山国泰寺にて立寄り調査すべしと

大正10年6月25日

宇波洞窟保存

内務省史蹟名勝天然紀念物保存調査会に於て本県下滑川浦に産する螢烏賊を保存物に編入すべきと既報の如くなるが尙先日柴田同会考查委員の調査に係る水見郡宇波村大の境古代人住居洞窟も同じく編入せらるゝと

大正10年7月2日

貝塚

祝部土器や土師器包含

再度の発掘（上）

学術研究上価値多き地域で

将来指定保存さる、ならん

大村富中教諭語る

水見郡水見町朝日字馬場、薬度寺附近に於ける石器時代及古墳時代遺跡地へ這般再び内務省史蹟名勝天然記念物調査保存会考査員柴田常恵氏出張し発掘を行ひたるが此際同行せる本県史蹟名勝天然記念物調査委員なる県立富山中学校教諭大村正之氏は右遺跡地に就いて語る「この附近に於ける石器時代遺跡貝塚の存在を知られたるは去る大正七年同地に国泰寺別院薬度寺を建築せんが為め地均しの時に土中から貝塚が出て来たのが端緒で同年九年柴田常恵氏の出張調査の結果其貝塚なることが世間に発表されたものである、然るに今回柴田氏は内務所の考査員として佐々木内務属と共に水見郡宇波村人境洞窟住居跡を指定保存の為めに調査を行はれ此序にこの貝塚を再び調査発掘が行はれたのである、而して此貝塚を学術的発掘を行ひたる結果層位的關係上他にあまり類例無き珍しきものと分明し更に之に接して祝部土器及び土師器包含地なるを發見した、實にこの一帯の地域は学術研究上の価値多き地点にして将来指定保存される地であらう、この馬場は水見の南部にある小学校から四町程西方にある潟山の麓で卯ち十二町村の洪積層の低山性の丘陵が東西に連亘せるが其東端が潟山であり其の山の直下の低い緩斜面の畠地が夫れである、高さ約十米突あり此地点に立ちて東西を望めば洋々たる富山湾が見え背景として緑色濃き潟山を負ひ景勝の地である、之を太占に考ふれば更に都合がよい眺望もよい、殊に海が近いから魚貝の利を得易く後方の山地に入らば狩猟によろしく山の辛海の幸意の便になる地点といふべく南方の十二町潟も近し、斯かる地勢は先史民族の如き原始的生活状態に最も適当な地点と云ふべきで今此處に古代の住民遺跡を見出すと云ふは決して偶然ならざるを知ることが能かる、又背後にある潟山は敵を防ぐにもよく古代人が城塞的に使用した形跡も認められた、この一帯に於ける遺物には二種の異なる性質のものがある、即ち石器時代の貝塚と古墳時代の遺物との二つであるが今回の調査で之が発見されたのである、貝塚はアイヌ系統の先住民族で吾々日本民族と異なる民族が先づこの地に住み貝を食したる貝殻が棄てられて堆積したもので其貝塚を発掘すると貝殻のみでなく其他に獸骨、魚骨日常使用した繩紋土器の破片や石斧等も混在するものである、後者は即ち祝部土器や土師器が包含され散布された地である、是れは吾々日本民族の祖先の製作使用したもので彼れ等もこの處に居住したのである、其時代は貝塚の時代よりはズット後世に屬し古墳時代に入つてゐる、この南方約五町を距たる地に雀森の円形古墳あり頂上には一小祠ある、今石郭の一部露出し蓋石の如き半壁石の落石せるを見たが這是恐らく古墳築造の時代の住民の居住遺跡地を見てよからう、兎に角奈良朝以前の日本民族祖先の使用製作にかかる土器の遺物が存在すると云ふのである、かく考へ来らば自らこの薬度寺附近の地点と宇波大境洞窟住居及び上新川郡東岩瀬附近の千原崎に於ける弥生式土器出土の遺蹟との関係、太古民族の時代的新しい分布、及び文化の性質程度も窺ひ知るの貴重なる材料である、又この馬場に先住石器民族時代、及び日本民族祖先の二つの時代、及び性質を異に

する遺跡が相隣接して存在することは非常に注意を喚起する、岡山県津雲は之に劣らざるものであつたが惜いかな總てが掘り返されて何物も求むることが出来ない、故にこの馬場を擲いて外に斯かる地点が余りないであらう」

大正10年7月3日

貝塚

祝部土器や土師器包含

羽度の発掘（ド）

学術研究上価値多き地域で

将来指定保存さる、ならん

大村富中教諭語る

前述は殆ど水面的で皮層的の観察であるが之を発掘調査して愈其学術的価値が増大して認みられたのである、柴田考査員も亦宇波大境洞窟と共に指定保存すべきものであると語つてゐられた。今発掘の経過を述べてみよう、先ず人夫を指揮して表面を試掘したるに祝部や土師器が散布し二尺も堀下ると土師器が出て三尺五寸で砂層に達した、これは丁度住居跡に堀あてたらしい又一方を発掘するに二尺五寸で土師器が出て二尺八寸にして砂層に出でた、以上二ヶ所共に繩紋土器が出でなかつた次に誓度寺の敷地は緩斜面を切り下げたものであるが背後鶴山の麓に六尺程の断面が現れてゐる、この切断面を注意して見ると古代住居の豊穴の跡が見え之を発掘してみると其中には灰屑木炭もあり多くの繩紋土器破片、石斧、石鎌も混じて埋れてゐた、次に誓度寺庫裏の南方にある貝塚を発掘せしに表土は黒色土壤で桑畑となつてゐたが一二尺程の下部は全く貝殻の層を有しての貝塚こそは石器時代人類が海や湖水から拾つた貝を食つた後の堆積で姫路郡北代村の姫森の貝塚も同様ではあるが之と彼とは迹も比較にならない、即ち此貝層は数尺あり頗る豊富なものである、而して貝殻にも種々あるが赤貝（土地の人はオトコガヒと称す）が最も多く蛤、蜆等が見出された、又この貝殻と一緒に海獣の下顎骨、鹿の肋骨、鮪の脊椎骨等も出でたが之によりて彼等の生活状態が漁労狩猟を盛んにやつた事を推定さる尚ほ繩紋土器も少からず混じてゐた今回此貝塚を学術的発掘の結果第一層は普通の黒色腐食土、第二層は貝屑より貝殻も共に普通の繩紋土器出で第三層は灰層で赤褐色を有し或は上層とも見へ第四層は貝層で骨、魚骨繩紋土器出で第五層は土層、第六層は貝層で之から出でし上器は普通の繩紋筋目の紋様でなくモザイフリ式に出来てゐる素紋の土器の上に細い糸の如き粘土を接合された様に見える造り方である第七土層は土層で第八層は又貝層で遂に砂層の地盤に達したが上下貝層は四尺六寸に及び而して上下の土器に因案意匠の上に大なる相違あり火に進歩があつた、都合八層の断面が明瞭に見られた事柄は他の貝塚に於ては類例の少き事で誠に珍しき貝塚と謂つべきである松本博士は斯様な上下両層の貝塚を陸前松島辺で発掘されて大変な年数を要する事を断言されし由なれば此貝塚は其意味に於ても学界に稀なる遺跡地であらう云々

第4章 調査の成果

本年度の調査は、諸般の事情により年度末になつたため、ここでは概要を記すにとどめ、詳細は次年度の報告書にまとめる予定である。

第1節 調査の概要

本年度は、国指定地であるA地点と、昭和6年の発掘調査で遺物包含層が確認されたD地点の中間に位置する水田を調査対象地区とし、両者のつながりを把握することを目的に、試掘トレンチを2カ所設定した。

調査対象地区は、水見市朝日丘134・135・136・137・139番地の水田約1,500m²で、ここにIトレンチとIIトレンチを設定した。調査期間は平成6年12月2日から平成7年3月24日までの延べ42日間で、発掘面積は約100m²である。

Iトレンチは、幅1.5m・長さ35mの淡川と平行する南北方向のトレンチで、IIトレンチは、幅1.5m・長さ32mでIトレンチと直角に設定した。Iトレンチは結果的に水田の暗渠排水とほぼ重なり、排水に影響の出ない部分を深掘りした。IIトレンチも暗渠排水の部分は保存し、それ以外の部分について深いところは約1mほど掘り下げた。両トレンチとも深さ約40cmを過ぎたあたりから涌水がひどく、調査は困難をきわめた。安全性の問題もあり、この地点では深さ約1mが素掘りの限界であろう。

第2節 層位

調査対象地区とした水田は、過去に数枚の田であったものを一枚に土改したもので、今回の調査でも水田の東側で上盛りが確認できた。ただしこの盛り土は地主の聞き取りから同じ地区的西側の土を東側の低い方に盛ったことが確認されており、発掘調査でもある程度遺物が出土している。

涌水の関係で今回調査の主力をおいたIトレンチ南側とIIトレンチ東側は、盛り土された部分にあたり、深さ約40cmの表土を取り除くと旧水田面が現われた。この旧表土にも遺物が含まれていた。

調査地区の土質は砂質であり、深いところでは粘質砂となる。盛り土は明褐色砂、旧耕作土は暗青灰色砂である。Iトレンチではその下に約20cmの黒褐色粘質砂層、有機物を含む黒色粘質砂層が続き、両者の間にブロック状に砂利を含んだ青灰色砂層がはいる。IIトレンチではその下に20~30cmの暗褐色砂層、10~30cmの黄色砂を含む暗褐色砂層、青色砂層が続く。

第3節 遺構

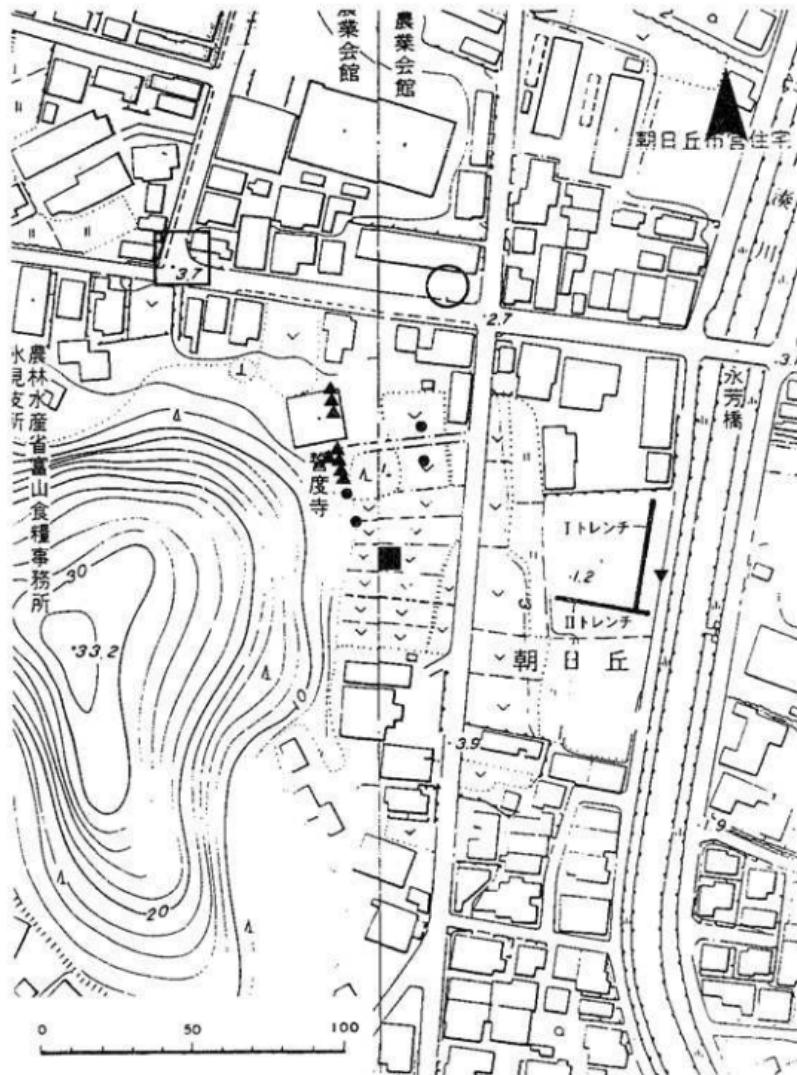
調査面積などの制約もあり、明確な遺構は確認できなかつたが、IIトレンチでは時期不明ではあるが、自然石が並べられたものや、杭列を確認した。

第4節 遺物

遺物は各トレンチの各層から出土した。量は整理箱約10箱分である。

I トレンチからは、縄文土器（中期）、石鏃、古墳時代須恵器杯、古代須恵器杯・甕、中世土師器皿、珠洲甕（12世紀後半）・鉢などが出土している。

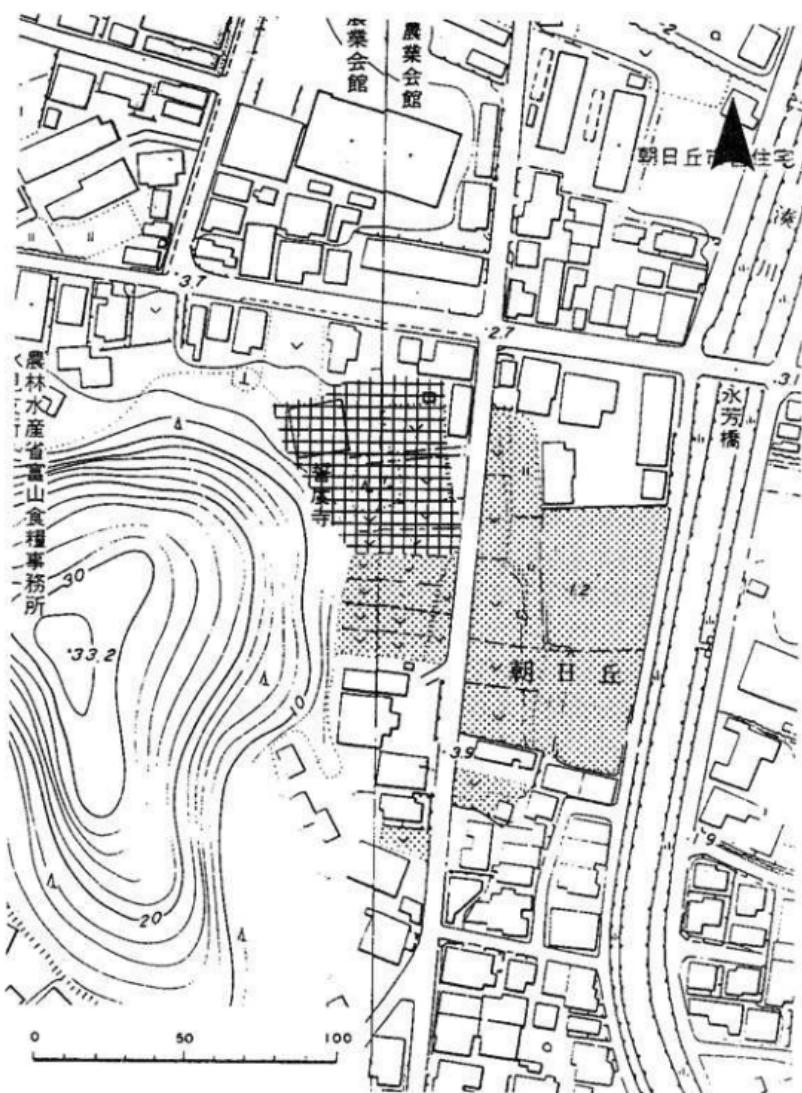
II トレンチからは、縄文土器（中～晚期）、土偶（脚部）、石鏃、石錐、打製石斧、弥生土器（中・後期）、古墳時代須恵器杯、古代須恵器杯・甕、古代土師器甕、中世土師器皿（15～16世紀）、珠洲甕・鉢（14～15世紀前半）、瀬戸美濃、越前、土鍤（約10個体）、銅錢（5枚）などが出土している。



- 大正10年調査推定地
- ▲ 大正13年調査推定地
- ▼ 昭和6年調査推定地
- 昭和24年調査対象地
(1~4号人骨出土地も、この付近か)

- B地点推定地
- C地点推定地

第9図 朝日貝塚調査地点



第10図 朝日貝塚指定地と遺物散布範囲
(格子目が指定地、網点は遺物の散布する農地)

第5章　まとめ

今回の調査の成果を以下にまとめる。

- 1 今年度は漆川西側の最下段の水田を調査対象地区とした。
- 2 縄文時代から中世に至る資料が出土した。これまでの知見とあわせると、今回は縄文時代前期の資料がほとんど確認されない一方で、弥生時代中期の資料がまとまって出土した。また、明確な造構の存在する可能性が高い。
- 3 縄文時代・弥生時代に加えて古代・中世の資料もまとめて出土し、長期間にわたる遺跡であることが追認された。
- 4 今回の調査対象地区で、貝層は確認されなかった。

これに加えて氷見市教育委員会では、平成5年度から7カ年計画で、市内遺跡詳細分布調査を実施している。今年度の調査対象地区には市街地地区も含まれ、春先の踏査では朝日貝塚周辺で縄文土器111片、弥生土器88片、古式土師器182片、円筒埴輪5片、須恵器71片、土師器165片、珠洲20片、黒色土器1片、越中瀬戸11片、伊万里11片、唐津1片、石器5点、不明陶器9片、弥生土器又は土師器424片の総計1104片の資料を採集した（氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告II』氷見市埋蔵文化財調査報告第17回）。これらの採集地点は、遺跡とその周囲の畑地全域にわたり、少なくともこの範囲に遺跡が広がることがうかがえた。

これらの成果から、朝日貝塚の東側の範囲はA地点とD地点の間を含めて少なくとも漆川まで継続しており、指定地東側と南側に接する農地のほとんどが、遺跡の範囲といえよう。

今後の課題としては、指定地の北側（B地点・C地点）と南側の確認、さらには漆川をはさんで対峙する岩上遺跡との関連の問題があげられ、次年度以降の調査の目的としたい。

なお、分布調査では岩上遺跡でも円筒埴輪が採集されており、両遺跡の性格に新たな疑問が追加されていることを追記しておく。

図 版



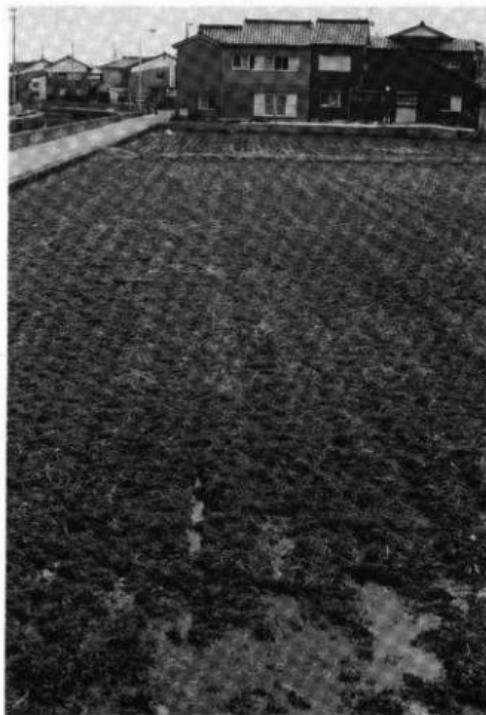
朝日貝塚周辺空中写真（昭和22年撮影）



調査地区遠景（東から、手前は渓川、奥は誓度寺）



調査地区遠景（西から）



調査地区近景（北から）



発掘作業風景
(西から)



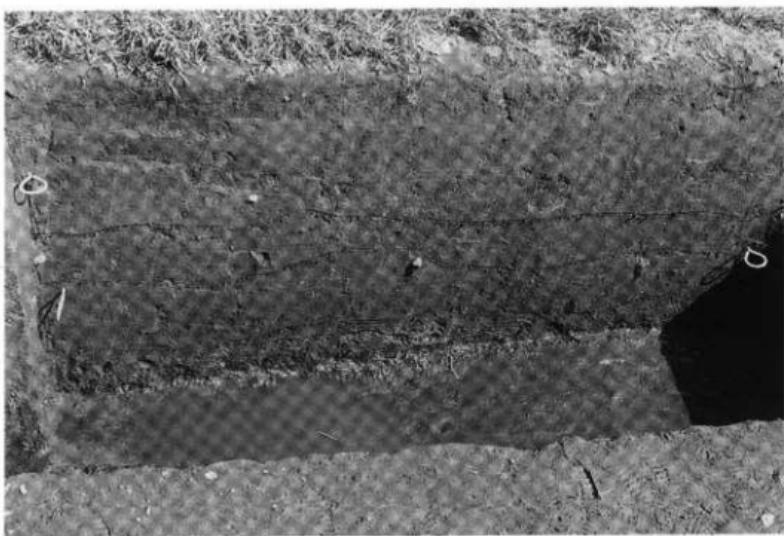
発掘作業風景
(南から)



埋め戻し作業風景
(西から)



I トレンチ (北から)



I トレンチ層序 (西から)



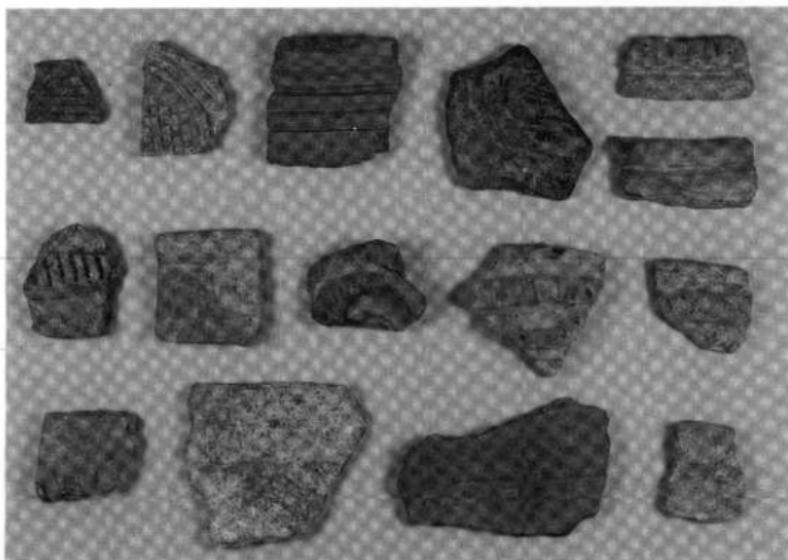
II トレンチ（西から）



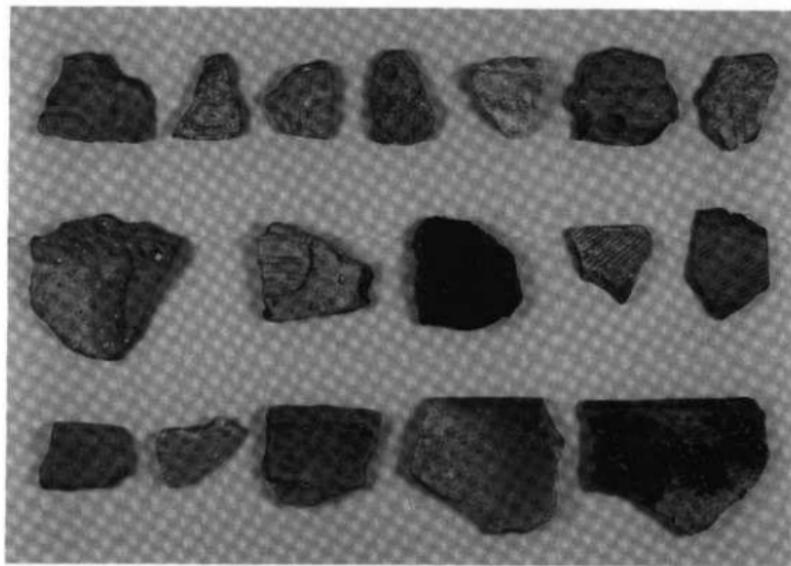
II トレンチ（東から）



I レンチ出土土器・石器



II レンチ出土土器（縄文）



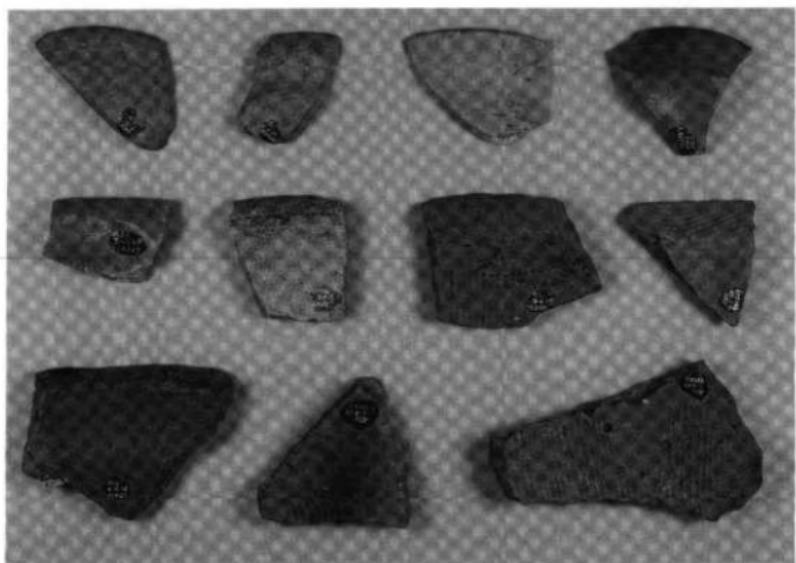
II トレンチ出土土器（縄文）



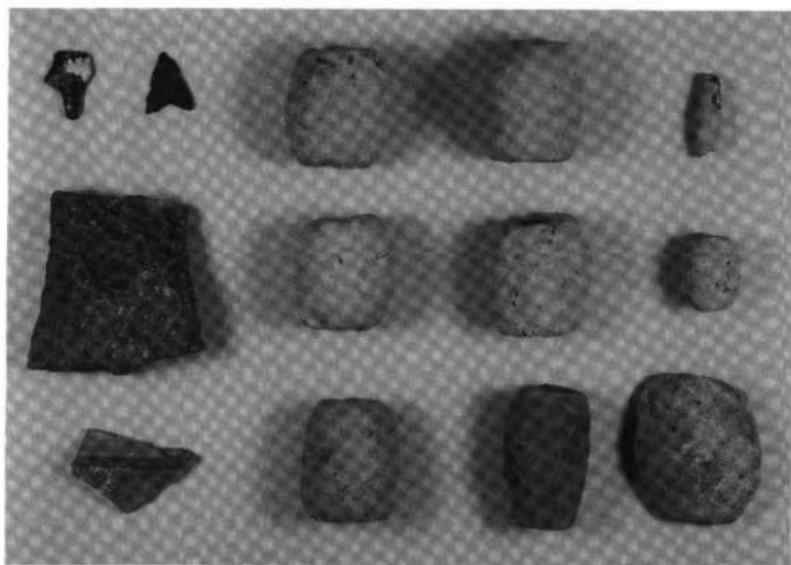
II トレンチ出土土器（弥生）



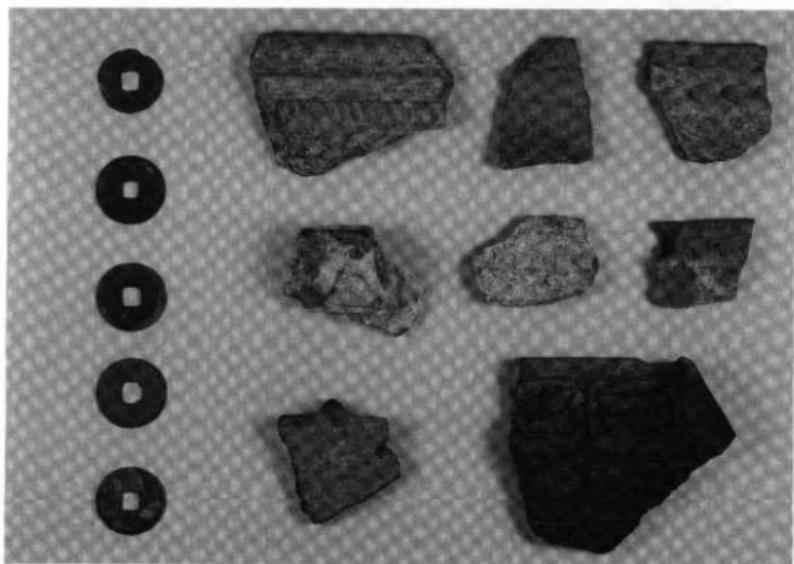
II トレンチ出土土器（古代）



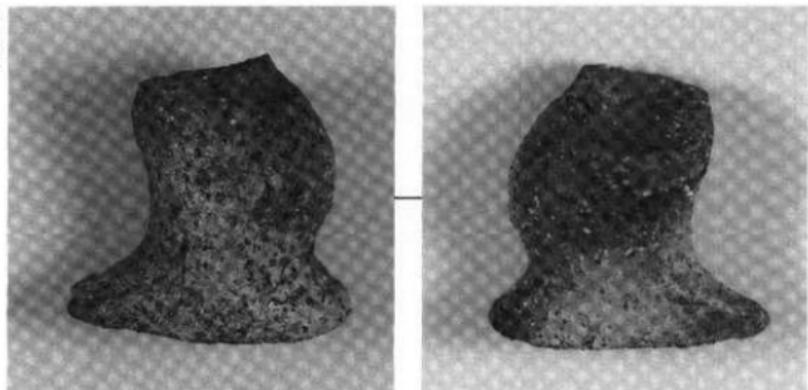
II トレンチ出土土器（中世）



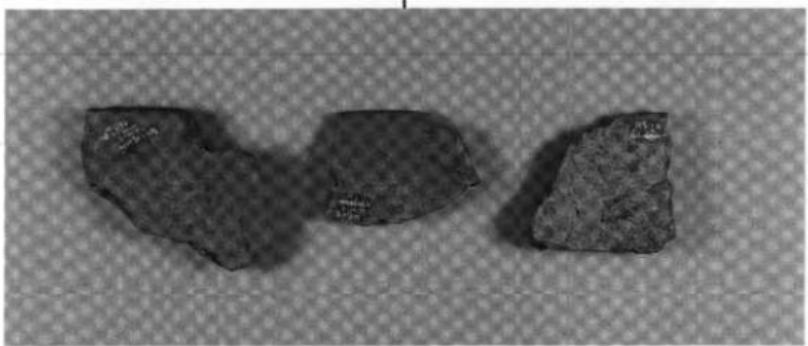
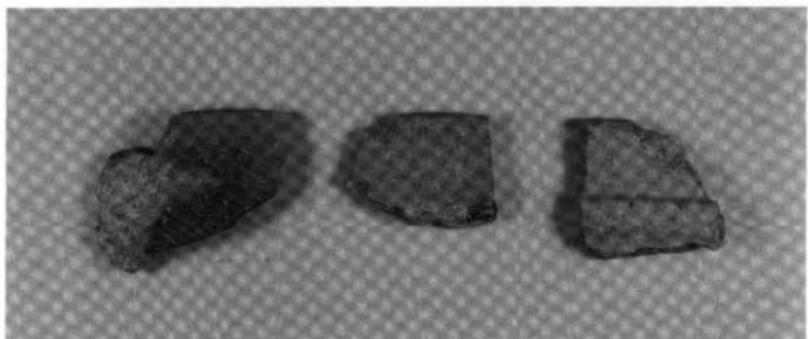
II トレンチ出土石器・土器（古墳時代須恵器）・土錘



II トレンチ出土古銭・指定地内表採土器（縄文）



II トレンチ出土土偶脚部 (1/4)



朝日貝塚採集埴輪片（左）と岩上遺跡採集埴輪片（中・右）

報告書抄録

ふりがな	あさひかいづか 1							
書名	朝日貝塚 I							
副書名	範囲確認試掘調査概要							
巻次	I							
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第19冊							
編著者名	大野究							
編集機関	水見市教育委員会							
所在地	〒935 富山県水見市本町4番9号 TEL 0766-74-8215							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²		
朝日貝塚	富山県 水見市 朝日丘	16205	56	36° 50' 40"	136° 59' 15"	1994.12.02 1995.03.24	100	範囲確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
朝日貝塚	貝塚 集落	縄文	石組?・杭列	縄文土器・土偶 ・石鐵・弥生土器 ・須恵器・土器 ・師器・珠洲など				
		弥生						
		古墳						
		古代 中世						

平成7年3月30日 印刷
平成7年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財調査報告第19冊

朝日貝塚 I

—範囲確認試掘調査(1)—

編集・発行 水見市教育委員会
〒935 富山県水見市本町4番9号
☎0766(74)8215
印 刷 (株)ひふみ印刷社